

教師評定と幼児の相互評定との関係

—幼児の相互評定を中心として—

中原 弘之
(茨城大学教育学部)

親子関係に関する諸変数を独立変数、幼児の集団内行動に関する諸変数を従属変数として、長島貞夫を中心に親子関係の児童の性格形成に及ぼす影響についての実験心理学的研究を行なっている。今回の報告は、この共同研究における資料の一部を用いて行なわれる。

目的：幼児の集団内行動を捉えるにあたって、幼稚園教師による協議評定と、幼児による相互評定（SociometryとGuess-Who Test）を実施したので、評定者の異なる2つの評定結果の関係を明らかにする。ただし今回は、幼児による相互評定を中心とする中間報告であり、次回に完結する。

対象：A幼稚園児200名（年長男児69名、年長女児61名、年少男児34名、年少女児36名）。この中には、能力的にみて回答の信頼性が危ぶまれる園児は含まれていない。

手続：Sociometry—ボール紙の台紙にはった園児の写真（クラス単位）、「すき」、「きらい」と書いてあるボール紙各1枚を用意し、まずクラス全員の写真を用意し、机上にならべて次の教示を与える。「ここに〇〇組さんのお友だちの写真があります。〇〇ちゃんは何れでしょう」。こうして5名の友人名をあげて写真を指摘させる。次に被験児に自分の写真を指摘させ、「すき」のボール紙上に置かせる。「これからお友だちの写真を見せますから、好きなお友だちの写真は、あなたの写真のある「すき」の紙の上に置きなさい。嫌いなお友だちの写真は「きらい」の紙の上に置きなさい」という順次写真を手渡し、教示を繰り返しながら分類させる。「すき」に分類された園児には〇、「きらい」にはXをもって記録用紙に記入する。

Guess-Who Test—Sociometry で使用した写真、ボール紙2枚を用意し、次の(1)～(4)の教示を与えて該当する写真（〇を記録）、該当しない写真（Xを記録）に2分類させる。

- (1) 友だちの面倒をみたり世話をしたりする親切なお友だち………Ⅰ
- (2) 喧嘩したり乱暴したりするお友だち………Ⅱ
- (3) あまり友だちと遊ばず、ひとりでじっとしていることの多いお友だち………Ⅲ
- (4) おとなしいけれど、いつも仲よくお友だちと

遊んでいる子………Ⅳ

この4種の教示は、図1のような幼児の集団内行動に関する2つの因子を組合することによって得られるⅠ～Ⅳの行動特性を表わすものであり、各因子の負荷量の高い項目を参考にして作成された。（茨城大学教育学部紀

要13,1963。日本保育学会18回大会抄録,1965）。

これらの測定には、8名の心理学専攻学生が、8つのクラスをそれぞれ担当し、個別面接によって実施した。

期日：昭和44年2月24日～26日。

結果：(1)選抜率と被選抜率—Sociometryの場合、どの園児も自分を除く他の全成員を、好嫌のいずれかに類別しているので、クラス単位に各園児の好意的選抜率の好意的被選抜率とを、それぞれ0～100の範囲に分布するよう算出した。

一方、Guess-Who Testの場合も、Ⅰ～Ⅳの各行動特性ごとに、その該当の有無を全クラス成員について測定しているので、各行動特性ごとに該当するとして選らばれた割合（被選抜率）をクラス単位に算出した。以上の結果をまとめたものが表1である。

表1 SociometryとGuess-Who Testによる得点の分布

測定値の内容		分布の範囲		Mdn	Q
Sociometry	好意的選抜率	14.3 ~ 100.0	68.5	12.7	
	好意的被選抜率	16.1 ~ 100.0	70.4	22.8	
Guess-Who Test	Ⅰ（積極的—肯定的）被選抜率	13.6 ~ 95.8	60.8	14.5	
	Ⅱ（積極的—否定的）	0 ~ 95.0	24.5	18.8	
	Ⅲ（消極的—否定的）	0 ~ 90.3	19.0	9.6	
	Ⅳ（消極的—肯定的）	5.0 ~ 96.4	63.7	15.0	

(2)選抜率と被選抜率の性差・年令差—表1に示された6種類の値が、被験児の性や年令とどのような関係をもっているかを明らかにするため、性、年令を因子として層合 χ^2 型要因分析を試みた。表2は6種類の値を、それぞれのMdnによって2分割し、Mdnより上位群をH、下位群をLとして、性・年令別に該当する頻数を示したものである。この表2に基づいて分析を試みた結果を、紙面の都合で下値のみに限定して一括すると表3のよう

になる。

表2 要因分析のための原表

性別	年齢	Sociometry				Guess-Who Test での被選採率							
		選採率		被選採率		I		II		III		IV	
		H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L
男	年長	27	42	31	38	9	60	57	12	29	40	10	59
	年少	16	18	14	20	11	23	24	10	23	11	13	21
女	年長	33	28	32	29	45	16	7	54	30	31	42	19
	年少	16	20	25	11	33	3	9	27	19	17	33	3
計		92	108	102	98	98	102	97	103	101	99	98	102

表3 算出されたFの値 (n₁=1, n₂=197)

測定値の内容		性差	年齢差
Sociometry	好意的選採率	0.758	0.015
	好意的被選採率	6.563 *	0.898
Guess-Who Test	I (積極的—肯定的) 被選採率	117.879 **	11.321 **
	II (積極的—否定的) "	102.058 **	0.016
	III (消極的—否定的) "	0.299	4.318 *
	IV (消極的—肯定的) "	87.860 **	16.381 **

* 5%水準 ** 1%水準

これによると、Sociometryでの選採率の大小は、性・年齢に関係ないが、被選採率では性差が見られ、女児の方が好意的に選採される傾向がある。

Guess-Who Test による行動特性 I と IV については、共に性・年齢両因子に有意差が見られ、I と IV に該当するとして選ばれる幼児は、男児く女児、年長児く年少児の傾向がある。しかし II は性差、III は年齢差というように、それぞれ一つの因子のみが有意である。

図2 積極的 女児
男児 年少 肯定的
否定的 II I
III IV
年少 女児
消極的 年少

以上の結果を図示すると図2の如くなり、幼児の性によって特色づけられる因子は、肯定的—否定的因子であり、かつ、Sociometry で女児が好意的被選採率が高いことから、肯定的—否定的因子は幼児期における好選採を支配する因子であることが予想される。

(3) Guess-Who Test による各行動特性と Sociometry との関係—I～IVの各行動特性は、Sociometry によってどのように特色づけられるかを明らかにするため、表4を作成し要因分析を行なった。

表4 要因分析のための原表

Sociometry		Guess-Who Test での被選採率								計
被選採率	選採率	I		II		III		IV		
		H	L	H	L	H	L	H	L	
H	H	35	14	14	35	23	26	39	10	49
	L	33	20	18	35	19	34	34	19	53
L	H	14	29	26	17	26	17	14	29	43
	L	16	39	39	16	33	22	11	44	55

表5 算出されたFの値

(n₁=1, n₂=197)

Guess-Who Test による 行動特性	Sociometry による	
	被選採率	選採率
I (積極的—肯定的) の場合	29.521 **	0.907
II (積極的—否定的) の場合	12.082 **	1.317
III (消極的—否定的) の場合	7.276 **	0.685
IV (消極的—肯定的) の場合	53.063 **	5.003 *

* 5%水準 ** 1%水準

分析の結果をまとめると表5の如くなる。すなわち、4つの行動特性は、いずれも Sociometry における好意的選採率よりも好意的被選採率と密接な関係を有し、ただ IV においてのみ Sociometry での好意的選採率とも有意な関係を示している。

図3 積極的 ける好意的選採率よりも
被選採率小 被選採率大 好意的被選採率と密接な
否定的 II I 肯定的 関係を有し、ただ IV にお
III IV いてのみ Sociometry での
被選採率小 被選採率大 好意的選採率とも有意な
選採率大 関係を示している。

これらのことを図示すると図3の如くなり、行動特性の I、IV に該当する幼児は、Sociometry において好意的に選採され、反対に II、III に該当する幼児は嫌われる傾向があるといえよう。

この分析によって、Sociometry における選採率の大小が、4つの行動特性と予期したほどの関係をもっていないことが知られた。そこで Sociometry における被選採率のみにつき、その上位群 (H) と下位群 (L) が、どのような行動特性によって特色づけられるかを分析した。その結果、表6 算出されたFの値 (n₁=1, n₂=405) 表6の如く肯定的—否定的因子のみが有意であり、好かれる幼児は I、IV の行動特性に該当し、嫌われる幼児は II、III の行動特性に該当することが知られた。

要約：友だちから好かれるのは女児が多く、かつ肯定的な行動特性を示す幼児であり、逆に嫌われるのは男児が多く、否定的な行動特性を有する幼児である。

行動特性 I に選ばれる幼児は年少児及び女児が多く、これらは好意的に選採される傾向がある。このことは行動特性 IV に選ばれる幼児にもあてはまる傾向である。行動特性 II に選ばれる幼児は男児に多く、これは友だちから嫌われる傾向を示し、やや年長児に多い。III に選ばれる幼児も嫌われる傾向を示すが、性差はなく年少児に該当する特性といえよう。

次回には、教師評定と関連づけて報告する。